

非可能性判断「カモ」「カモデス」の使用傾向についての考察

石井千晶（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

ここ近年感情文の「変です」「嬉しい」に「カモシレナイ」を縮約した「カモ」や「カモデス」を付けて「うわっ、変かも」「これ（荷物）、ちょっと持ってくれれば嬉しいかもです。」のような表現形式がある。このような「カモ」「カモデス」の使われ方を本発表では非可能性判断と定義し、まず感情文に「カモシレマセン」「カモシレナイ」ではなく、「カモ」や「カモデス」が使用される傾向があるのか。次に感情文に「カモシレマセン」「カモシレナイ」ではなく、なぜ「カモ」「カモデス」を付けなければならないのか。というところに注目し発表を行った。一つめの発表目的では現代日本語書き言葉均衡コーパスで抽出した用例を用いて発表者が作成した分類表をもとに「カモ」「カモデス」が感情文において接続しやすいことを明らかにした。また、2つ目の目的では YouTube やドラマやテレビ番組など自然会話から抽出した例文を用いて「カモシレマセン」「カモシレナイ」と「カモ」「カモデス」の使用の違いを明らかにした。

主要部内在型関係節と持ち主の受身

田村隆夫（埼玉大学博士後期課程修了）

主要部内在型関係節構文の「の」の後に現れる格助詞は、通常(1)のように主節動詞が要求するものとなる。しかし、(2)では事情が異なる。

- (1) 母がこの写真を捨てようとしたのを祖母が預かって、私に渡してくれました。

1999 津島 佑子(著) 私 新潮社

- (2) なにしろ十八年前の冬の朝、あの銀杏の木の下で捨てられて泣いていたのを、執事の玄英さまに拾われて養女にいただいた身ですもの。

1995 五木 寛之(著) 蓮如 中央公論社

これに関して、次の現象が注目される。同構文の(4)と持ち主の受身文の(3)からの「私」の主題化に、平行性が読み取れるのである。

- (3) { 私の...カサが } 誰かに持って行かれた。
{ 私は カサを } 誰かに持って行かれた。

- (4) { 私が...木の下に捨てられていたのが } 玄英さまに拾われた。
{ 私は 木の下に捨てられていたのを } 玄英さまに拾われた。

(5)(6)では、定型の持ち主の受身文が（ ）内を含めば同構文となる。両者には、「人や事物の動きや状態が「の」を伴う名詞節で表される（日本語記述文法研究会（編）6(2008:21)）」現象を介しての関係性が窺える。

- (5) 私はカサ（をカサ立てに入れておいたの）を誰かに持って行かれた。

- (6) 私はスリに財布（を身に付けていたの）を盗られた。

（参考文献）日本語記述文法研究会(編)6 第11部複文(2008) くろしお出版

ChatGPT に関する中日メディアの報道研究

—批判的談話分析を方法論として—

陳冬姝/徐静萱（北京外国語大学講師/北京外国語大学大学院生）

本発表は批判的談話分析を方法論として、ChatGPT に対する中日メディアの態度と認識を比較することを目的としたものである。研究対象は 2022 年 12 月から 2023 年 5 月まで中国の『澎湃新聞』と日本の『読売新聞』に掲載されている ChatGPT についての新聞記事（無料版）である。Cap(2013)が提出した近接化理論の STA モデル (Spatial-Temporal-Axiological) に基づき、中日メディアでは AI・ChatGPT に関する技術領域のもの (ODC) がそれぞれ空間的・時間的・価値観的にどのように人間世界 (IDC) に影響を与えていくのかを考察した結果、『澎湃新聞』は ODC の近接に注目し、ODC の近接を IDC に利益を与えるポジティブなものとして捉え、チャット GPT を代表とする人工知能は人間に利益をもたらす良いものであると読者を説得しようとしているのに対して、『読売新聞』は IDC が取っている措置に注目し、ODC の近接を IDC にリスクを生じるネガティブなものとして捉え、チャット GPT を代表とする人工知能は人間世界に危険を及ぼす可能性が高く、気を付けなければならないものであると読者を説得しようとしている、ということが明らかとなった。

中国人日本語学習者の『ものだ』の習得状況に対する考察

—理解と産出の視点に基づいて—

蔡妍（福建師範大学准教授）

本研究は、各用法について理解難易度と産出難易度の調査を行うことによって、中国人日本語学習者の「ものだ」の習得状況を考察した。

意味解釈問題（短文／長文）と四者択一問題からなる理解テストと、多肢選択式問題、談話完成問題と翻訳問題からなる産出テストを実施した。エントロピー加重法と線形加重和法を用いることによって、理解難易度を「本質＞当為＞感慨＞回想＞願望」に、産出難易度を「回想＞当為＞感慨＞願望＞本質」に算出した。また、対応のある t 検定によって、理解と産出とのギャップをも検証した。その結果、産出テストの得点に比べて、理解テストのほうが有意に低いことが明らかになった。

理解難易度の結果を見ると、多義語の意味理解における学習者のカテゴリー形成が示唆される。意味カテゴリーの間には確立度と難易度の違いがみられると思われる。一方、各用法の産出難易度に関しては、その用法の典型性、教授順序、接触頻度に関わっている可能性が高い。産出レベルの習得効果が理解レベルを上回っていることは、学習者の産出能力の育成が有効であることを示した一方、今後は理解能力に対する育成、考察、測定をより一層強化していく必要があることをも示唆している。